

佳作

二宮金次郎が繋ぐ絆

広島県 広島県立呉三津田高等学校一年 南千陽

私たちの住む呉市では四年前に大雨による土砂災害によって数多くの命が失われました。

当時小学校五年生だった私は、テレビで呉の変わり果てた姿を見て思わず絶句しました。豪雨で外に出ることが危険だったため、テレビとインターネットだけが状況を知る唯一の手段でした。この日は雷雨が激しく恐怖のあまり中々寝られませんでした。

翌日、窓から見た見た光景に家族は騒然となりました。自分たちのすぐそばの道路が冠水していたのです。今まで経験したことのない事態に私はパニックになり、「このままでは、自分の命も危ないんじゃないか。」

と思わず言ってしまった。幸い私たちは官舎の最上階に住んでいたため、浸水の被害はありませんでしたが、同じ官舎の一階が浸水。住人総出で使えなくなった家具の片付けを行いました。七月の暑い日であったため、作業は難航しました。しかしボランティアの方々に来てくださったり、片付けを素早く終わらせることができました。

ト全員でできることについての話をするまでに話が進んでいきました。

そして、クラス全員で担任の先生に熊本の方々の助けたいと相談に行くようになっていきました。四月ということもあり、総合の時間で熊本への支援をする方向になりました。

クラスで支援に向けて頑張るぞ、という気持ちが高まっているころ、私はとても悩んでいました。なぜなら、何をして、寄付金を集めるか決めてもいかなかったからです。

どのようにして寄付金を集めるかは試行錯誤しました。街頭で募金活動をする、野菜を作って発売、など様々な取り組みを考えました。しかし、京都府の北部ということもあり、人口が少なく、募金などは少し難しいと思いました。

クラスで何度も話し合いをした結果、まず野菜と米を作ることになりました。

野菜を校庭で作りはじめたのですがとある問題に悩まされることとなります。それは、害虫です。ウリハムシやアブラムシが葉を食べていました。そのため、休憩時間は害虫をつかまえつづけていました。畝なども作り、この問題を無事解決しました。一ヶ月以上かけて野菜を守りました。田植えも行い、秋を待ちました。結果的に、バザーで売ることになり、学校全体で行う大規模

ボランティアの山本さんは、二〇一六年の熊本地震がきっかけでボランティアを始めたそうです。熊本地震では最大震度七の大地震が二度も起こりました。家屋の倒壊や地震による土砂災害によって多くの命が失われました。山本さんは、

「今までに経験したことのない揺れでした。続く余震に恐怖を抱きました。」

と当時の揺れについて語ってくれました。

熊本地震が起こった二〇一六年、私は父の転勤で京都府に住んでいました。小学校四年生だった私は、地震によって家が崩れていく様子を見て、言葉を失いました。「何か自分たちができることはないのだろうか。」

ふと口に出た言葉でした。これが二年後起こる奇跡の始まりでした。

一人が思っているでも、行動に移さなければ何も変わらないことは分かっていました。しかし、一人で行動を起こすのは当時の自分にはできませんでした。本音を言ってしまうえば、必ずやってやろうとかそんな感じではなかったもので、行動を起こすことには後ろ向きだったと思います。

次の日、クラスメイトと昨日の地震について話をしました。その際に自分の願いについて少し話をすると、「僕も誰かの役に立ちたい。」

そう言ってくれました。その子を筆頭に、クラスメイ

イベントとなりました。脱穀し終えた稲もしめ縄作りに利用しました。しめ縄作りのとき、新聞記者から取材を受けたのは良い思い出です。

二期期の終わりにバザーを開き、結果的に十万円ほど得ることができました。皆のやりきった感を見て、自分までも嬉しくなりました。十万円は熊本の小学校の二宮金次郎再建に役立てられました。

このような話をしながら、ボランティアの山本さんと盛り上がっていると、山本さんがふと考え込み始めました。

「もしかしたら…二宮金次郎像が地元の小学校で再建されたって聞いたんだよね。みんな感謝してたな。」

私の行動は間違ってたなと確信できた瞬間でした。それと同時に、誰かが誰かに助けられるということは、素晴らしいことだなと思いました。